

小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善 ならびに情報共有コミュニティの構築

永倉 由里

要旨：本稿は、本学 2020 年度授業改善等研究費助成事業「小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導に関わる授業改善ならびに情報共有システムの構築」の一環として行った教育・研究活動を述べるものである。まず、背景にある小学校外国語教育の現状と本学教育学部初等教育課程の学生の実態ならびに文部科学省が求めている英語指導力に優れた小学校教員の養成の必要性を確認する。続いて、研究の目的、計画、実践概要を述べ、最後に、①授業見学や情報共有コミュニティ Shizuoka English Room を通して現場の実情を把握し、現職教員と学生との交流を図ることが、授業改善につながったこと、②クラウド上での指導案と模擬授業動画の共有や一連の活動を紹介するブログ「目指せ！Happy English Teacher!」の運営などの ICT 活用が、学生の主体的・協働的活動を促す結果となったことを紹介する。

キーワード：小学校英語，授業改善，情報共有コミュニティ，ICT 活用

1. はじめに

本稿は、本学 2020 年度授業改善等研究費助成事業「小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導に関わる授業改善ならびに情報共有システムの構築」の一環として行った教育・研究活動の概要を述べるものである。

次章では、研究の背景にある小学校における外国語活動・外国語を取り巻く状況と本学教育学部初等教育課程の学生の実態ならびに文部科学省が強く求めている英語指導力に優れた小学校教員の養成・輩出の必要性を確認する。

続いて、研究の目的と計画、実践概要について述べる。最後に、①授業見学や情報共有コミュニティ Shizuoka English Room の活動を通して現場の実情把握と現職教員と学生との交流に努めることが、授業改善、特に模擬授業の質の向上につながったこと、②クラウド上での指導案ならびに模擬授業動画の共有や一連の活動を紹介するブログ「目指せ！Happy English Teacher!」の運営などの ICT 活用が、学生の主体的・協働的活動を促す結果となったことを紹介する。

2. 研究の背景

筆者は、教育学部初等教育課程において、小学校における外国語活動・外国語指導に関わる科目「英語 I」「英語科教育法」を担当している。小学校では、本年度から新学指導要領が本格実施されているが、外国語活動・外国語には、他の教科とは異なる問題が多々あり、先の見通しにくい状況が続いている。

2.1 小学校現場の実情

2020 年度は、新学習指導要領本格実施の 1 年目である。卒業後小学校教諭となる者は、いずれ小学校英語教育に携わることになる。小学校英語教育は今回の学習指導要領改訂の目玉の一つ

であるが、以下のように課題が山積している。

- (1) 専科教員・ALT・補助指導員の配置（学校により異なる，専科教員の配置は半数以下など），研修の質と量，チームティーチングのための打ち合わせ時間の確保などについて，依然として模索が続いている。
- (2) 他教科と比べ，教師の授業経験と授業スキルならびに情意にかなりの個人差がある。英語を理由に小1・小2を希望するベテラン教員が少なくないと聞いている。
- (3) 移行期の授業時間数（例：同じ5年生でも70～50時間と幅がある）が影響している。
- (4) 特に，5，6年生の学習内容（レベルが高すぎる?）に対する認識と実施状況に地域差，学校差があると懸念される。
- (5) 教科化に伴う「評価」の方法（特に，学びに向かう力について）が浸透していない。
- (6) 働き方改革・情報管理の厳格化などにより，勤務状況に変化や制限が生じている。
- (7) ネット環境，タブレット等の整備と教員のICT活用スキルの育成が急がれてはいるものの，十分とは言えず，学校間格差も大きい。
- (8) 本学学生の学修状況：2020年度3～4年生は小学校英語指導に関わる科目が必修ではない。附属橘小学校と公立小学校の英語教育の在り方にはかなり隔たりがある。

2.2 英語指導力に優れた小学校教員養成・輩出への期待

文部科学省は，2014年度より，グローバル化に対応した英語教育改革実施計画に沿って，国として「英語教育推進リーダー」を養成し，各県では，彼らが講師となって研修を行い，各学校に1名程度の割合で「中核教員」を配置した。さらに「中核教員」が中心となって校内研修を実施し，全小学校教員の英語指導力の向上に努めることになっている。働き方改革により，専科教員も配置されるようになってきている。2017年度，2018年度には，小学校教員を対象とした「中学英語二種免許講習」が実施され，静岡県内で40名ほどが同資格を取得した。このような担任の英語力・英語授業力の向上のための研修に加え，教員養成課程の改善・充実の必要性が強く求められている（文部科学省，2014，図1参照）。

また，他教科に先立って，外国語に関しては「コア・カリキュラム（全国すべての大学の教員養成課程で共通的に修得すべき資質能力を示したもの）」が策定され，教員養成大学は責任を持って，これに則した教育を遂行しなければならない。

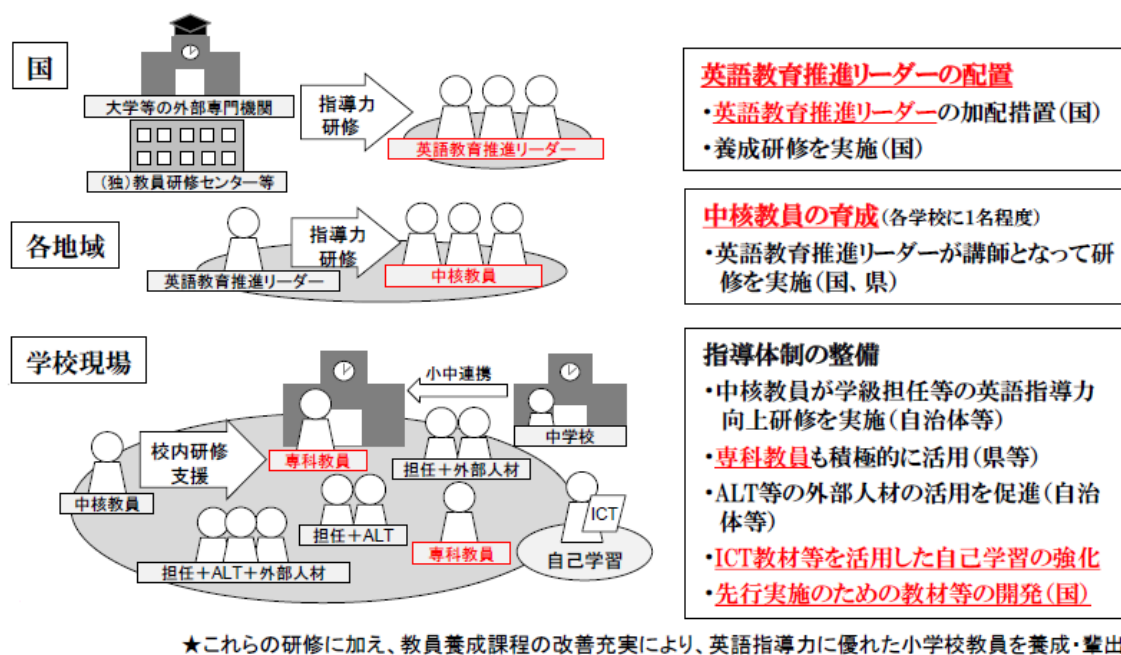
ICT活用を含む多岐にわたる教育改革との関連性，中高との連携，評価の在り方等，未だ不透明な部分も多いため，本学(教育学部一初等教育課程)としては，国・自治体の動きを注視し，学生に適切な情報を提供するとともに，現場の状況・ニーズを把握し，小学校英語教育において求められる指導力を育成していかなければならない。

2.3 学生の実態

他教科と比較し，障壁となるのが，小中高での英語学習体験である。小学校では，総合的な学習の一環として「外国語活動」を経験しているものの，新学習指導要領が目指す「外国語活動」並びに教科となった「外国語」とは，その内容についても，学習プロセスについても異なる点はかなり見られる。中学高校でもコミュニケーションを重視することにはなっていたが，実際には，入試との関連もあり，従来の授業スタイルが踏襲されていたと言わざるを得ない。学生たちの中には，「読み・書き」「文法・訳読」中心の英語学習経験からか，「聞く・話す」中心の使える英語に対して苦手意識を持つ者も少なくない。

小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善
ならびに情報共有コミュニティの構築

図1 新たな英語教育の在り方実現のための体制整備【指導体制の現状と今後】



3. 研究の目的

前節で述べた諸課題を考慮し「優れた教員の養成」という使命を果たすため、本研究の目的を以下の3点とする。

- ①市内の小学校の外国語授業を見学し、現場の実情把握に努める。
- ②現職教員による授業風景を録画・編集し、授業中に紹介することで現場の実情把握に役立てる。さらに授業中に学生が行う「模擬授業」を編集し限定公開することで、学生同士の協働的学び合いをサポートする。
- ③在学生・卒業生および現職小学校教員が参加する交流と情報共有のためのコミュニティを運営する。

4. 研究計画

ここでは、具体的な研究計画を述べる。「現場の実情把握」「授業改善」「研究論文執筆」「情報共有コミュニティ構築」を柱とし、それらが相互に良い影響をもたらすことを期待した。紙幅の関係で図2に集約する。

5. 研究の成果

現場の動向を注視し、学生には、現場の「今」をイメージしやすい形で紹介することに加え、動画とICTを積極的に活用することにより、学生の模擬授業への意欲を高め、自己省察を深めることが可能になると考え、諸活動を遂行した。

5.1 小学校外国語授業の見学

コロナに影響でなかなか小学校への訪問は認められなかったが、10月から11月にかけて、4校で7回の授業を見学させてもらった(表1参照)。マスクを着用し、向かい合っの対話や手

小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善
ならびに情報共有コミュニティの構築

が触れるカルタなどは行われていなかったが、子どもたちは元気に活動していた。これらに先立って、たちばな小学校の4年生と6年生の授業も見学させてもらった。

図2 本研究活動のイメージ図

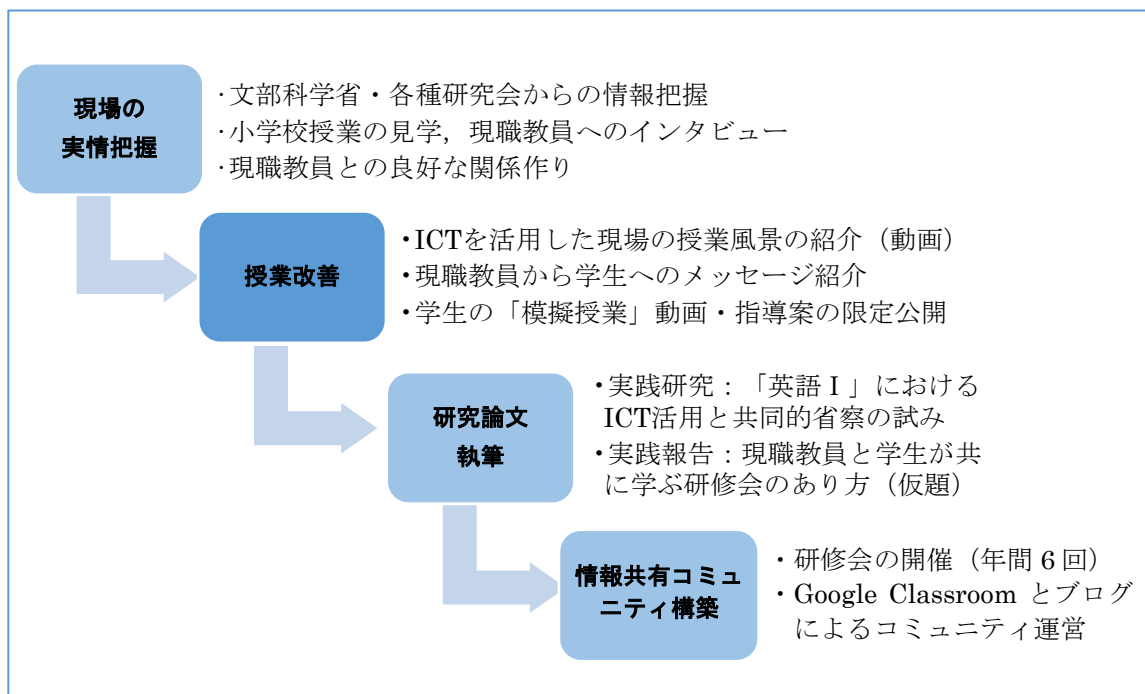


表1 静岡市内4校での授業見学

月日	小学校名	見学したクラスと Unit	担当教諭
10/13 (火)	静岡市立 A ₁ 小学校	小学 3 年生 Unit 4	M 教諭 (担任)
10/19 (月)	静岡市立 A ₂ 小学校	小学 5 年生 Unit 8	T 教諭 (専科) + GET*
10/26 (月)	静岡市立 A ₂ 小学校	小学 6 年生 Unit 5	T 教諭 (専科) + GET
11/13 (金)	静岡市立 M 小学校	小学 5 年生 Unit 6	K 教諭 (専科) + GET
11/13 (金)	静岡市立 M 小学校	小学 6 年生 Unit 5	K 教諭 (専科) + GET
11/18 (水)	静岡市立 O 小学校	小学 5 年生 Unit 6	K 教諭 (専科) + GET
11/18 (水)	静岡市立 O 小学校	小学 6 年生 Unit 5	K 教諭 (専科) + GET

GET*は静岡市が配置している日本人支援員, Glocal (global+local) English Teacher

今年度から、静岡市で採択された光村図書の『Here we go! 5』『Here we go! 6』とそのデジタル教科書を使うことになっていたが、コロナの影響で、前年度末から6月までが休業期間だったことから、本来8時間が当てられている各Unitに6時間を当てるのが精一杯だということだった。そのほかにも、

- ・デジタル教科書に慣れてはきたが、その豊富な機能を使いこなしているとは言えない。
- ・ゲームややり取りが制限されているため、児童が消極的になりがち。
- ・授業を進めるのがやっとなので、記録に残す「評価の在り方」が定まっていない。
- ・3小学校で専科をしているが、児童の理解や学級の雰囲気への把握に時間がかかる。
- ・各校の先生方との関係性も微妙で児童に関する情報交換が不十分だと感じる（専科）。
- ・ALT・GETとのティームティーチングは3校3様で、学びも多いが難しさも感じる。

小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善 ならびに情報共有コミュニティの構築

- ・コロナ禍によるコミュニケーション不足などの児童への影響が感じられる。
 - ・子どもたちの ICT 活用は驚くほどで、順調に広がっていくと期待される。
- など、貴重な情報が得られた。

見学先では、児童の顔を撮らないという約束で、撮影を許可していただいた。了解を得たうえで、編集したものを授業中に紹介してもらった。楽しい授業を展開させ、シンプルでありながら、事実や気持ちが伝わる英語を使用している姿を伝えることができた。

模範とすべき授業動画は、文部科学省や各地の教育委員会のサイトで公開されているが、そのほとんどは、研究指定校等の特別な条件のもとで、授業力の高い教師が行ったものである。模擬授業の参考にしようと思っても、学生にとっては、ハードルが高く、すぐに手の届くものではない。訪問先で見学させてもらった「いつも通りの」授業風景から、小学校における英語教育の浸透ぶり、デジタル教科書を軸に進められる授業展開、コロナ禍での活動の様子など、現場の日常の姿を紹介することができた。

授業者からいただいた略案と動画を照らし合わせて検討できたことで、模擬授業へのモチベーションを高めることにもなった。学生たちは、Google Classroom 上で、互いの模擬授業指導案と動画を共有することに同意し、参考にし合った。先生役として授業風景を見直すだけでなく、児童役として体験と振り返りから気づくことも多く、授業中のグループ・ディスカッションが目に見えて活発になり、模擬授業の内容についても、ポイントとなる「見方・考え方を働かせ」「リアルなやり取り」を促す工夫がそこそこに見られた。

図 3 Shizuoka English Roo を紹介するチラシ

また、模擬授業の動画とその指導案をブログ上で限定公開し、下級生にも参考にしてもらおうと持ち掛けると、予想以上に多くの学生が賛同してくれ、自ら編集を行い、ブログへの掲載に協力してくれた (5.3 で後述)。

授業者の先生方は、次節で述べるコミュニティにも頻繁に参加していただいているため、授業動画を視聴した学生たちが直に質問したり、学生のうちに学んでおくべきことについての助言をいただく機会も得られている。

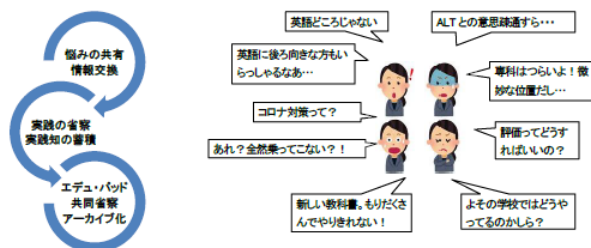
5.2 小学校外国語教育の活性化を目指すコミュニティ Shizuoka English Room

4 年ほど前、校内研修の助言講師を依頼されたのを縁に、小学校の先生方と勉強会を立ち上げた。学校帰りに自宅に寄ってもらい、

Shizuoka English Room

(小学校外国語教育の活性化と教師の成長を促す実践共有コミュニティ)

モットーは、目指せ！Happy Teacher! 外国語教育を通じて、英語に限らない広い意味での「コミュニケーション能力」「生きる力」を育てることを目指しましょう！



教師としての成長≒実践共有コミュニティの成長

Shizuoka English Room からの提案

① お悩み・お困り・疑問のシェア

② 活動のアイデア

評価の仕方
パフォーマンス・テストのやり方
教材・教具の工夫

を、紹介(現場の先生方がリレー形式で)
を、ブログで紹介。

※ 実践紹介、使えるサイト紹介、授業動画の共有等、役立つ情報をシェアしましょう。
また、GIGA 構想の展開も注視し、コミュニティの運営には、オフラインとオンライン両方を活用していく予定です。



小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善
ならびに情報共有コミュニティの構築

あれこれ、おしゃべりをするところから始まった。決して簡単ではなかった小学校での外国語活動と取り組む中で、その魅力と教育的効果に、大きな可能性を感じていることが伝わってきた。児童のより良い学びを願う懸命さばかりでなく、外国語教育についての教師間の温度差、やるべきこと・やってはならないことが増え、多忙を極める毎日の様子も窺い知ることができた。

何度か集ううちに、既存の研修会とは違う「学びの場」のコンセプトが浮かび上がり、会の名称を「Shizuoka English Room」とした。「すべては児童のより良い学びのために」をモットーに、メンバー同士がフラットな関係性のもとにオープンな対話をしたいと考えた。

小学校外国語教育の活性化と教師の成長を促すコミュニティを目指すこととし、周辺にも声を掛け合うようになった。図3は、その当時作成したチラシである。

2018年度、2019年度は、永倉ゼミの学生など、関心を寄せてくれる学生らとともに、草薙キャンパスで年数回開催した。2020年度は、Zoomでの開催に舵を切り、これまで6回実施している(表2参照)。

表2 2020年度のShizuoka English Room(オンライン開催)

① 7月11日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ対策3案, English Dayのメニュー ・永倉ゼミの学生3名による研究活動報告 (1) Small Talk力がアップする動画作成 (2) ICT活用初めの一歩 (3) Beyonders(オンライン・トーク・コミュニティ)の試み ・Break out(近況報告, お困りごと等について)
② 10月3日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・ブログ「目指せ! Happy English Teacher」の解説について ・最近の現場の様子, 新教科書, 評価等についての意見交換
③ 10月31日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・藤枝市立F小学校のI先生の実践報告 「3密を避けた外国語科の実践~新教科書を使いながら3密を避けた外国語の授業~」 ・Break out(近況報告, お困りごと等について)
④ 12月19日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡市立M小学校のK先生の実践報告 「コロナ禍での英語専科1年目~戸惑いと発見と希望~半年間の振り返りシートを見返して見えてきたもの~」 ・Break out(近況報告, お困りごと等について)
⑤ 1月23日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡市立A小学校のM先生の実践報告 「小学校外国語活動におけるICT活用」 ~ICT活用研究授業を行って~ ・Break out(近況報告, お困りごと等について)
⑥ 3月27日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡市立A中学校のT先生の実践報告 「小学校外国語指導~反省と工夫と発見~」 ・Break out(近況報告, お困りごと等について)

Shizuoka English Roomは、現場の先生方の授業実践、パフォーマンス・テストの実際、振り返りシートとそこからの見取り方などについての発表や、ブレイクアウト・ルームでの情報・意見交換等により、先生方にとっても学生たちにとっても多くを学べる場である。

時には、学生が提案者となり、模擬授業の中で行ったSmall Talkについて助言をいただいたり、卒業研究のテーマに関して、現場からの視点でアドバイスをいただいたりもした。

年齢や立場を超え、児童のハッピーで主体的な学びをサポートするHappy Teacherへの成長

を目指す活動と言える。

5.3 ブログ「目指せ！Happy English Teacher!」の運営

オンライン授業を余儀なくされた間に、学生とのより効率的な報告・連絡・相談（ホウ・レン・ソウ）のために、Google Classroom の活用と自作ブログ「目指せ！Happy English Teacher!」(<http://happylearning.doorblog.jp/>) の運営を本格化させた。

同ブログは、小学校英語指導において、最も必要とされる「授業力」を養う目的で運営している。多くの学生が、模擬授業動画の編集・限定公開の持ち掛けに賛同し、YouTube デビューを果たしてくれたことから、主体性・人間力につながる学びのプロセスを体験し、できる感・わかる感（自己肯定感）を享受してくれたことを嬉しく思う。

図4 自作ブログ「目指せ！Happy English Teacher!」(一部)



履修者に尋ねたところ、全員が、模擬授業の準備に際しブログ上の情報を活用していた。模擬授業には、デジタル教科書を使う場面が必ず入ってくるので、県内で採択された2社の教科書の指導者用デジタル教材を学内で利用できるよう整備した。

6. まとめに代えて ～コミュニティの果たす役割と可能性～

筆者は、高校・[短期]大学の英語教師として、自身の授業に関して、学習者理解、動機づけ、自律学習、学習方略、第二言語習得理論に基づく授業法等の視点で、授業改善を主たる目的として実践研究を継続してきた。英語教師として成長のための実践研究である。

一方、現場の先生方は、教育委員会主催の研修会や校外での研究授業と合評会・協議会などに、一業務として参加することがほとんどである。自主的な少人数の勉強会や学会に参加する者もあるが、多くは、組織としてのオフィシャルな枠組みの中で研修会として行われている。

1980年代から学校が専門家の学びの共同体になることの必要性が着目されるようになり、佐藤(2015)は「同僚性 (collegiality)」と翻訳し「授業の創造と研修において教師が専門家として連帯する関係」として紹介している。

ところで、教師が協働的探求を行う学びの共同体を表すものに、Cop (Community of Practice) と PLC (Professional Learning Community) がある。これらについて、Crandall & Christison (2016, p.18) は、以下のように定義している。

Professional learning communities are generally school-or institution-based learning communities where teachers work together to critically reflect on their practice, increase their professional knowledge, and improve student learning.

PLCは、一般的に学校または教育機関ベースの学習コミュニティであり、教師が協力して実践を批判的に振り返り、専門知識を高め、生徒の学習を向上させる（筆者和訳）。

CoPs promote collaboration among individuals in many different regions or even nations, made possible by web-based programs for discussion, reflection, and the sharing of ideas or resources (e.g., blogs, discussion boards, and chats).

CoPは、様々な地域や国の個々のコラボレーションを促進する。それは、ディスカッション、振り返り、アイデアやリソースの共有（ブログ、ディスカッションボード、チャットなど）のためのWebベースのプログラムによって可能になる（筆者和訳）。

従って、校内外の研修会や研究授業は、PLCに分類される。どちらも、教育の向上に貢献しているが、前者は、組織のからのオーダーが発端となっている。もちろん、授業者には、妥当な教員が選ばれ、熱心にかつ綿密に準備がなされ、研究授業当日を迎える。波及効果として、周辺地域の教員の授業力向上が期待される。

これらの成果については、授業の実際、研究報告書、児童・生徒のその後の活躍などから疑う余地もないが、課題も残されている。共通するのが、人的配置・設備面・予算面などの「特別な条件」が約束されていることである。

より良い条件を整える努力は今後も必要だが、目の前の児童・生徒・学生のために、許される条件の中で何をしたいのか、何ができるかを丸となって、考え、実践し、振り返ることが重要である。ラグビー界から流行語ごとなった **One for all, all for one**. あるいは全教員が「チーム学校」の一員であるという認識に立ちたいものである。

新学習指導要領では、従来の知識偏重の学習からの脱却が叫ばれ、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、「学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」が謳われている。

これらを授業において具現化していくには、教える側も、学ぶ側も、教育の社会的側面に着目すべきであろう。Wenger (1998) は、「学習は社会参加であり、... (中略) ... 社会的コミュニティの実践に能動的に参加するという包括的な過程とコミュニティに関連したアイデンティティの確立でもある」としている。

すなわち、教員も教職を志す学生も、「社会的コミュニティの実践に能動的に参加する」体験を通して、そうした学びの在り方を自身の教育活動に反映させなければならない。

本稿で紹介したShizuoka English Room は、非公式なコミュニティであり、そこでは、自主

小学校現場の実情把握と動画活用による小学校英語指導授業改善 ならびに情報共有コミュニティの構築

的参加により、立場等に縛られない自由な発言・質疑応答が展開する。小学校外国語教育における授業改善を目的としているが、これまでの発表や対話で根底にあるのは、児童の人格的成長に貢献したいという熱い思いである。まさに学習指導要領が目指す目標を授業において具現化するには、こうした CoP が必要であると確信する。

コロナ禍もあり、全国的に、オンラインによる現場目線のCoP が徐々に増えている。立場を超え、「思い」を少しずつでも「カタチ」にしていこうという草の根的なものが多いが、ICT を駆使し、フラットでオープンなコミュニティとして発展を遂げているところもある。

教員養成で定評のある本学から、学び・成長し続けるより質の高い教師を輩出するためにも、現場で生きる実践的な教育活動（模擬授業等に係る動画活動、CoP であるShizuoka English Room の運営）を継続し、主体的・協働的に教育に取り組む態度の育成に努めることを約束する。

参考文献

Crandall, J., & Christison, M. (2016). *Teacher education and professional development in TESOL: Global perspectives. (Global Research on Teaching and Learning English)*. New York: Routledge.

文部科学省 (2014). 「新たな英語教育の在り方実現のための体制整備【指導体制の現状と今後】」

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf

佐藤学(2015). 『専門家として教師を育てる—教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店

Wenger, E. (1998). *Communities of practice: Learning, meaning, and identity*. New York: Cambridge University Press.